マンガの眼②

大友克洋の作品と読者

奇想天外社刊『ショート・ピース』より

ある特定のマンガ家の作品が、どのような支持のされかたをしているか、という視角で、マンガをみる必要があるばあいもある。そういう意味で、最近でた大友克洋の作品集『ショート・ピース』を読んでいろいろなことを考える。

大友の作品には、わかい世代のあいだでひろいとはいえないにしても、ふかく熱い支持があるらしい。他のほとんどの劇画作品もわかものたちを描いているにもかかわらず、ことさらに大友の作品が「若者たちを描き、今、最も期待されているマンガ家」(『ショート・ピース』のカヴァーの句)というふうにみられてしまう事実がはらむものこそ、大友作品の内実を精確と映すかげである。

数か月まえ、大友作品について、「軽快なフットワークで人間の生き死にを切っていく思想が、ついに、そうした軽さしかもたないことで充足してしまうダメな部分をもっていることが問題なのである」と某誌に書いたところ、ただちに月刊『東京情報』のマンガパワー欄で反論(?)された。要するに、描かれている〝人間の生き死に〟そのものの軽さこそが問題なのであり、「自分の生活やら感情やら論理やらを絶対化することのできない〝相対化された生〟が大友作品のベースなのである」(同二月号)、というわけだ。

大友作品をめぐる評価では、掛値なくこのマンガパワー欄のものが最良のものだとおもう。『ショート・ピース』の八作品をみても、そのことはよくわかる。だが、同時に、だからこそ大友作品の限界もまた明確にみえてくる。こういういいかたが、大友克洋ファンをイライラさせる最大の原因なのだろうが、わたしにいわせれば、大友が描くわかものたちに「相対化された生」をみるというのは錯覚にすぎない。手アカにまみれたことばである「人生の重さ」にいらだつわかものたちが大友作品によく描かれはするけれども、そこに反映されるかれらの生き死にの軽快さなどは、いつの時代のわかものでもいやおうなくひきうけざるをえないていどに陳腐で古くさい価値観にすぎない。

大友克洋ファンの言辞を聞いていて、もっとも異和感をおぼえるのは、そうした点に無自覚なことである。大友が真摯に描くわかものたちのフザけた生きざまが、「相対化された生」をベースにしているのだとしたら、かれらの生は楽天的にすぎる。生き死にを相対化できる視点とは、すくなくとも楽天的に語ることのできるポジションではない。一部の大友ファンがコロッとまいってしまうのは、結局のところ、大友じしんの韜晦や逃避指向がもつ甘さに、みずからを無邪気に重ねることができる劇画表現の古さを穏当にもっているからである。

劇画の現状のなかで相対的にみるかぎり、大友がましな作家であることは否定できない。けれども、そのこと以上に大友の読者の一部の熱狂ぶりの内実がましなものとはいえない。

梶井・純

巡礼

つりたくにこ

ゴクン

ごちそう
さま
コン

もう一ぱい
どうですか
いえ
次の礼所へ
翌日までに
つきたいのです

忙がねば
なりません

雨が降り
そうです

あのう…

僕やっと
あす88番目
の札所へ
ゆきつくんです

満願
するんです
ほう

処ヨリ西二里
八十八番札

そんなはず
ないでしょう
あの道は
何本にもわ
かれていて
道しるべ
どおりに
ゆくと大きな
村へ出るん
です

確かですよ
私も一度
行ったことが
ありますからね。
きっと見間違い
でしょう
スポーツ

今度は
よく
たしかめて
からゆくんで
すよ
新発売!

ヨリ
八十

END

10. 1969